

## “on” を用いた情意表現について<sup>(\*)</sup>

土 井 隆 広

### は じ め に

代名詞 *on* が定的な人称代名詞の代理として用いられると、発話に特殊な意味合い（以下、情意）が生じる場合がある。

- (01) *On n'a pas peur de vous, sachez-le bien.*<sup>(1)</sup> (on=je, 傲慢)
- (02) *On vous a déjà rencontré, monsieur.* (on=je, 謙遜)
- (03) *On a été sage aujourd'hui?* (on=tu, 愛情)
- (04) *L'ambitieux est sans cesse agité : on brigue, on intrigue, on complotte (...)* (on=il, 軽蔑)

これに関しては、従来、WAGNER et PINCHON (1962) のように現象の指摘だけにとどまり、納得のゆく説明はほとんど行なわれてこなかった。

《*On peut se substituer à tous les pronoms sujets grammaticaux pour traduire la distance qu'un locuteur veut établir entre lui et autrui ou pour souligner un sentiment d'ironie, d'affection, de mépris, de froideur ou d'orgueil.*》 (p. 203)

同一の言語記号 *on* が用いられながら、文脈・状況の違いによって様々な情意が生じる。そして、生じる情意も「傲慢」「謙遜」、「愛情」「軽蔑」といった具合にまったく相反するものになりうる。これは、極めて特異な現象であると言える。

最近の *on* の研究の高まりと共に、この現象にも本格的な考察が加えられ始めている<sup>(2)</sup>。しかし、それらの論考も、この情意の発現を、*on* の固有の価値

と文脈・状況との係わりの結果とするのがせいぜいで、どういう文脈・状況と on がどのように係わるのかについてはほとんど言及していない。こういった研究の現状にあって、青木（1989）と田口（1990）は、人称の問題を絡めた新たな観点を提示し、今後の研究の方向を示唆するという意味で非常に価値が高い。on の使用による情意の発現の研究は、まだ端緒についたばかりである。

小論では、青木（1989）、田口（1990）が持つ問題点の指摘を出発点として、この情意発現の仕組みを新しい原理で説明することを試みる。

## 1. 問題の所在

on の使用による情意の発現を説明するに当たり、青木（1989）、田口（1990）は、まず on の言語記号としての価値を、それぞれ次のように規定する。

「(on は) 述語から規定を受けているだけで、指示的には発話レベルのいかなる要素とも関係づけられていない事態参与の主体を表す」

（青木, 1989, pp. 20-21）

「on の固有の意味内容は「人は誰でも」であり、これは1-3人称代名詞間に前提される相互排除的対立を含まない、汎人称的概念である」

（田口, 1990, p. 22）

そして、この規定を踏まえて、(05) のような on の使用によって「愛情」という情意が生じた例に対して、以下のような説明を試みている。

(05) Alors, on n'est pas content de jouer au cheval?

「on は発話者一共発話者の関係自体を中和してしまうために、on を使用することで発話者は共発話者の立場に立つことができるようになる」

（青木, 1989, p. 22）

「on はいかなる発話の場においても前提される、発話者と共発話者、第三者の相互排除的対立を解消することによって、親しみの感情を表すのである」

（田口, 1990, p. 25）

両者とも、on の使用を一種の人称操作、人称の解体・解消と捉え、そこから

情意の発現を説明していると言える。情意の発現を、専ら on の固有の価値と文脈・状況との係わりから生ずるとして済ませてきた従来の説明から大きく前進した画期的な見解である。しかし、問題がなくはない。青木は、例文(01)のような「傲慢」についても「愛情」の場合と同様に、「他の発話主体を排除していた発話者が、今度は、on によって自分をその他大勢の発話主体の一人に規定しなおされる（ところから生じる）」(p. 22) という説明を行なっているが、「発話主体の規定のされなおし」に関して、それがどのような場合にどう行なわれるのかは明らかにしていない。そのために、「愛情」と「傲慢」の発現の差が判然としないままである。汎人称性という概念を導入した田口の説明に関しても同様の指摘が行なえる。両者の見解は、問題の核心に肉薄したものであるが、この点で、情意の発現の説明原理としては、不十分であると言わざるをえない。これは、情意およびその発現に関して、それをどう捉え、どう説明するかについての準備・前提を欠いていることに起因している。

まず、情意の性格を明確に規定する必要がある。この規定がなければ、現象の説明は、結局、曖昧の域にとどまることになる。「愛情」「傲慢」が共に、人称の解体・解消から生じるとしても、情意の規定がなされなければ、「愛情」と「傲慢」の差を明確に示すことができず、その差は文脈・状況の影響から生じるという説明に終始することになる。

次に、発話が行なわれる場で、当然前提されているはずの発話者と共発話者の間の優位関係（対等もしくはどちらかが優位）を考慮に入れなければならない。いかなる発話もこの優位関係の下に行なわれるのであるから、on の使用による情意の発現を考察するには、この関係を見捨てることはできない。例えば、「傲慢」は相手を見下す態度に出る、「愛情」は相手の立場まで下りるといった具合に、情意とは、発話者と共発話者の間の前提された優位関係が変動させられるところから生じる表現効果であると考えることができるのである。

青木（1989）、田口（1990）に欠けているとして、ここに示した二点は、情意表現としての on を論じる場合、最低限必要なものであると考える。小論では、この「情意の規定」と「前提される優位関係」を考察の軸とする。

## 2. 情意と対話の場の優位関係

on の使用によって生じる情意には, TOGEBY (1984) によれば, 「謙遜」「控え目」「皮肉」「軽蔑」「愛情」「傲慢」「非難」「婉曲」「親切」等があるとされる<sup>(a)</sup>。情意の種類は, 文脈・状況に応じて形容すれば, このように多岐にわたるものとなるが, 情意を対話の場の優位関係を基にした発話者から共発話者に対する感情の表出とみなす立場を採れば, 次のような三種類の表現行為から生じる表現効果として捉えることができるようになる<sup>(a)</sup>。

見下す	「軽蔑」「傲慢」等
へり下る	「謙遜」「控え目」等
相手に近づく	「愛情」「親切」等

これら3種類の表現行為は, 「優位度の変動」という観点から捉え直せば, 次の二つの行為に収斂する。

自分の優位度を上げる態度に出る	見下す
自分の優位度を下げる態度に出る	へり下る, 相手に近づく

以上の考え方を基に, 小論では, 情意を次のように規定する。

- 発話者が共発話者に対して示す優位度の変動によって生じる特殊な意味合い

また, 対話の場において発話者と共発話者の間で成立している優位関係を共発話者に対して + (発話者が上), 0 (対等), - (発話者が下) と表すことにすれば, 情意の発現は, 次のように捉えることが可能になる<sup>(a)</sup>。

へり下る	: +→0, 0→-, -→--
見下す	: +→+++, 0→+, -→0
相手に近づく	: +→0

情意と優位関係に関して以上のような捉え方をすれば, 情意の発現に関して, 明瞭な説明を行なえるようになる。ただ, 「軽蔑」と「傲慢」, 「愛情」と「親切」の差異は, この考察方法では測ることはできない。発話の内容, 文脈・状

況の影響，さらにはイントネーション等の諸要因を考案に入れる必要があるが，これは，小論の範囲を越える問題である。

### 3. 情意の発現の仕組み

この節では，前提される発話者と共発話者の間の優位関係ごとに，on が発話者の代理をしている場合，共発話者の代理をしている場合の二つに分け，on の使用によって，どのように情意が生じるかについて考察を進めてゆく。第1節の例文(04)のような on が第三者の代理をしている場合については，対話内の優位関係だけでなく，発話者または共発話者と第三者との優位関係がさらに関与してくるため，情意の発現の仕組みは，かなり複雑になると予想される。情意の発現の基本的な仕組みを示すことを目的とする小論では，これは取り上げない。

なお，前提される優位関係と情意の発現については，映画シナリオから採った例文は筆者が文脈から判断し，論文・辞典から採った例文は筆者が文脈・状況を想定して判断した。判断が妥当であることは，インフォーマントに確認を取った。

#### 3.1. 「on＝発話者」の場合

##### 3.1.1. 前提される発話者の優位度 十

用例が見つからない。また，インフォーマントからは「ありえない発話である」という意見が得られた。このことからすると発話者が上位にある場合には，発話者が自分自身を on と表現して何らかの情意を出すことはないということになる。同様の現象は，以下でも現われる。これに関しては，3.3.で述べる。

##### 3.1.2. 前提される発話者の優位度 0

- (06) Avec vous, au moins, *on* ne s’ennuie pas. (客→店員)  
 (07) *On* ne t’a jamais dit ça! (親しい間柄)  
 (08) Alors, *on* voudrait savoir si ça en vaut la peine. (親しい間柄)  
 (09) Mais tais-toi donc, pourquoi faut-il qu’*on* te le répète?  
 (親しい間柄)

いずれも言い争いに近い状況の下で行なわれている発話である。情意としては、「傲慢」「軽蔑」等が生じていると言える。この情意の発現については、次のような説明が可能である。*on* の使用によって、前提された優位関係、対等、に上向きの変動が生じた、つまり、発話者の優位度が0から+へと増し、対等の関係が発話者が共発話者を見下す関係へと変わったのである。

発話者の優位度が0→-となる用例は見つからない。

### 3.1.3. 前提される発話者の優位度 -

- (10) *On* vous a déjà rencontré, monsieur. (親しくない間柄)  
 (11) *On* voit bien que vous venez d’arriver. (衛兵→伍長)  
 (12) Que voulez-vous, *on* fait ce qu’*on* peut. (部下→上司)  
 (13) *On* n’a pas l’habitude, vous savez. (部下→上司)

親しくない間柄では双方が丁寧な発話を行ない、上下関係が明瞭な間柄では下位者が丁寧な発話を行なうのが通例である。そういった発話で、発話者が自らを *on* と表現している例である。(10)(11)では「謙遜」「丁寧」、(12)(13)では不必要な「謙遜」つまり「嫌味」を感じ取ることができる。共に *on* の使用によって、発話者の優位度がさらに低まった(-→-)ところから生じた情意であると説明することができる。

発話者の優位度が-→0となる用例は見つからない。

## 3.2. 「on=共発話者」の場合

### 3.2.1. 前提される発話者の優位度 +

- (14) Est-*on* contente? (夫→妻)  
 (15) Alors, *on* n'est pas content de jouer au cheval? (親→子)  
 (16) *On* a été sage aujourd'hui? (親→子)

立場的に上位にある発話者が、共発話者を表現するのに *on* を使用している例であり、ここでは、「愛情」という情意を感じ取ることができる。この「愛情」の発現は、次のように説明することができる。*on* の使用によって発話者の優位度が下がり ( $+\rightarrow 0$ )、発話者と共発話者の間に対等な関係が成立する、つまり、発話者が共発話者の立場、地位にまで下りてくるところから、「愛情」の情意が生じるのである。

発話者の優位度  $+\rightarrow ++$  の用例は見つからない。

### 3.2.2. 前提される発話者の優位度 0

- (17) Avec Mouchette *on* prend le plaisir et pas le reste.  
 (親しい間柄, 愛人同士)  
 (18) Qu'est-ce qu'*on* me veut? (親しい間柄)  
 (19) *On* s'amuse bien, à ce que je vois. (親しい間柄)  
 (20) *On* est en vacances? (親しい間柄)

3.1.2. 同様、陰悪な状況の下で行なわれている発話である。3.1.2. と同様で「傲慢」「軽蔑」の情意を感じ取ることができる。*on* によって表現されるものは、3.1.2. とは逆に共発話者であるが、3.1.2. と同様のメカニズムが働いて、発話者の優位度が増し ( $0 \rightarrow +$ )、対等の関係が発話者が共発話者を見下す関係へと変わったのである。

発話者の優位度  $0 \rightarrow -$  の用例は見つからない。

### 3.2.3. 前提される発話者の優位度 -

3.1.1. と同様で、用例が見つからない。インフォーマントからは、「そのような発話は想定できない」という意見を得た。

### 3.3. 問題点とその解釈の試み

3.1.～3.2.の内容は、次のようにまとめることができる。

- on の使用によって、発話者の優位度は、発話者、共発話者のいずれを on とするかにかかわらず、以下のように変動する

発話者と共発話者が対等関係 : 発話者の優位度が上がる

発話者と共発話者が非対等関係 : 発話者の優位度が下がる

この優位関係の変動によって様々な情意が生じるのだと考えることができる。しかし、次のような疑問点が残る。

- 上以外の優位度の変動（ $++ \rightarrow ++$ ,  $0 \rightarrow -$ ,  $-- \rightarrow 0$ の三パターン）の用例がないのはなぜか
- 発話者の優位度+で、「on=発話者」の用例がないのはなぜか
- 発話者の優位度-で、「on=共発話者」の用例がないのはなぜか

要するに、①～⑤のような発話者の優位度の変動パターンが存在しないのである。

①  $++ \rightarrow ++$       ②  $0 \rightarrow -$       ③  $-- \rightarrow 0$

④  $++ \rightarrow 0$  (on=発話者)

⑤  $-- \rightarrow --$  (on=共発話者)

これについては、次のような説明が考えられる。

①  $++ \rightarrow ++$

上位にある発話者がさらに上位になろうとする行為であるが、これは、現実の行為として考えにくい。on を用いた表現以外でも、これを実現することは、通常の表現では、難しいと思われる。

②  $0 \rightarrow -$

この優位度の変動は、共発話者と対等の立場にある発話者がへり下る態度に出る行為である。これは、通常のコミュニケーションの場では想定するのが困難である。人称の操作という表現行為では実現できず、例えば、(21)のような明瞭な形での表現が必要となる。



(21) Bien entendu, monsieur. À votre service. (親しい間柄)

このような表現を用いれば、発話者のへり下った感情が明瞭になる。しかし、これは、ふざけるとか冗談を言うといった突出した表現行為である。

③  $- \rightarrow 0$

下位にある発話者が共発話者と肩を並べようとする行為である。(22)くらいのかかなり激しい表現を取らない限りこれは実現できそうにない。

(22) Tu dis toujours n'importe quoi! (部下→上司)

②の場合と同様で、これも突出した表現行為と言える。

以上①, ②, ③に共通して言えることは、この種の優位度の変動は、onを使用した人称操作程度の表現では実現が難しいあるいは不可能で、そのために実際の使用が行なわれないということである。言い換えれば、onを用いた表現は、(21)(22)等とは異なって、感情の表出度が比較的隠健な表現ということになる。

④  $+ \rightarrow 0$  (on=発話者)

⑤  $- \rightarrow -$  (on=共発話者)

これらは①, ②, ③とは事情が異なる。④であれば on=共発話者, ⑤であれば on=発話者とすれば実現可能な表現行為となる(3.2.1., 3.1.3.)。ここでは、onが何を代理するかということと優位度の変動の関係が問題となってくる。優位度の変動には、onが何を代理するかに関して、何らかの制約があるようである。つまり、対等の関係においては、発話者、共発話者のどちらをonと表現してもよいが、非対等の関係においては、上位の者をonと表現してはならないとでもいった制約である。この制約がどこからくるかは、即断を許さない問題であるが、上位にある者は一般に明瞭な表現で指示しなければならないといった語用論的な約束事があり、それを反映しての現象とも考えられる。その理論的な説明は今後の課題として保留することにする。

## お わ り に

小論では、人称の解体・解消による発話者の優位度の変動という作業仮説の下に、on の使用による情意の発現の仕組みを説明してきた。この説明原理からすると、情意の発現は、単純に「対等の場合は発話者の優位度を上げ、非対等の場合は発話者の優位度を下げる」ところから生じると結論できる。この単純な情意の発現の原理が、実際の使用の場では、文脈や状況と複雑に絡み合い、様々なニュアンスを生むことになる。情意が「謙遜」「控え目」「皮肉」「軽蔑」「愛情」等と様々に形容されるのも、そのためである。

小論では、on が je, tu の代理をする場合で、情意を生じる場合のみを取り上げたが、「on の使用において、いかなる場合に情意が生じるか」は、まだ解決を見ていない大きな問題である。定的な人称代名詞の代わりに on が用いられるときに情意が生じると簡単に説明されることが多いが、必ずしもそうとは言い切れない。これは、主体の了解の難易度と関連させて論じなければならない問題である。人称代名詞の使用の問題と絡めながら稿を改めて検討する予定である。

## 註

- \* 曾我祐典、石野好一の両氏には、草稿の段階で、貴重な意見を頂いた。また、Olivier BIRMANN 氏にはインフォーマントとして協力して頂いた。ここで改めて、三氏にお礼を申し上げる。
- (1) 例文は、雑誌『ふらんす』のシナリオから採集した他は、朝倉(1955)、青木(1989)、田口(1990)、土井(1989, 1990, 1991a)から引用した。
- (2) 土井(1991b)参照。
- (3) TOGEBY (1984), t. I, p. 429.
- (4) したがって、TOGEBY (1984) が挙げる「婉曲」や on の使用に関して指摘されることの多い「曖昧」「ごまかし」等は、情意とは異質のものである。それらは、on の意味内容の空疎さから直接生じるものである。
- (5) ここに示す変動は、理論上のものであり、これらがすべて実際に起こるというわけではない。3.1.～3.2.参照。

## 参 照 文 献

- MULLER, C. (1979): “Sur les emplois personnels de l'indéfini *on*”, *Langue française et linguistique quantitative*, Éditions Slatkine, pp. 65-72.
- SANDBELD, Kr. (1965): *Syntaxe du français contemporain t. I*, Champion.
- TOGBY, J. (1984): *Grammaire française I*, Études Romanes de l'Université de Copenhague.
- VIOLLET, C. (1988): “Mais qui est *on*? Étude linguistique des valeurs de *on* dans un corpus oral”, *LINX*, 18, pp. 67-75.
- WAGNER, R. L. et PINCHON, J. (1962): *Grammaire du français*, Hachette.
- 朝倉季雄 (1955): 「フランス文法事典」, 白水社.
- 青木三郎 (1989): 「人称に関する日・仏語対照言語学的研究」, 『文藝言語研究 言語篇』, 16, 筑波大学, pp. 1-44.
- 田口紀子 (1990): 「不定名詞 “on” の汎人称性について」, 『仏文研究』, 21, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, pp. 21-34.
- 土井隆広 (1989): 「代名詞 “ON” に関する一試論」, 『年報・フランス研究』, 23, 関西学院大学フランス学会, pp. 109-122.
- (1990): 「フランス語の代名詞 “ON” の使用について」, 『人文論究』, 40-3, 関西学院大学人文学会, pp. 75-89.
- (1991 a): 「“ON” の使用と主体の了解」, 『TLLMF』, 2, 大阪市立大学文学研究科森本研究室, pp. 40-45.
- (1991 b): 「“on” に関する研究の現状と展望」, 『年報・フランス研究』, 25, 関西学院大学フランス学会, pp. 83-94.
- 藤村逸子 (1990): 「主語の人称指標 ON の価値を決定する条件」, 『年報・フランス研究』, 24, 関西学院大学フランス学会, pp. 117-126.

———大学院博士課程後期課程———